

令和 6 年 5 月 1 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13285

研究課題名（和文）ニューギニア高地における紛争の感情と「実存の時間」に関する人類学的研究

研究課題名（英文）An anthropological study of the emotions of conflict and existential time in the New Guinea Highlands

研究代表者

深川 宏樹（FUKAGAWA, Hiroki）

神戸大学・国際文化学研究所・准教授

研究者番号：00821927

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、これまで申請者が、パプアニューギニアで研究してきた紛争の処理と感情の動態という枠組みを、新たに過去・現在・未来にわたる「伝記的な生」に光を当てる「実存の時間の人類学」的アプローチへと展開し、紛争とその処理の文脈で発せられる感情的な言葉や、親しい者との葛藤を抱えた者が苦悩とともに残す「死に際という言葉」が、周囲の人々の現在に影響し、未来にわたって持続する効果をもつに至る社会的機制を解明し、独自の身体-感情言語論として理論化することで、紛争処理研究、感情研究、言語研究等の進展を促すものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年の社会性をめぐる文化人類学の議論が、形式的な関係概念により事例を分析する「関係主義」を主とするのに対し、本研究は、社会生活を形式的な関係概念を軸に論理的に説明し尽くすのではなく、個々の人格が、自らの置かれた社会環境・歴史・生の時間に比して、自らの実存、自らの「伝記的な生の企て」をときに卑小なものとして、ときに巨大なるものとして再測定させ、新たな物語や文脈が開かれる契機を構成する言語に光を当てる。従って、本研究は従来の紛争・感情研究や時間の人類学に新たな知見を加え、人間の実存と未来投企の具体的な可能性を示す点で、学術的にも社会的にも貢献しうる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to develop the framework of conflict processing and emotional dynamics that the applicant has been studying in Papua New Guinea into a new “anthropological approach to existential time” that sheds light on “biographical life” spanning the past, present, and future. From this perspective, this study will elucidate the social mechanisms by which emotional words uttered in the context of conflicts and their resolutions, as well as “dying words” left behind with pain by people in conflict with their loved ones, affect the present of the people around them and have lasting effects into the future. By theorizing the case and its mechanisms as an original body-emotion language theory, this research will promote the advancement of conflict resolution research, emotion research, language research, and so on.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学 身体 社会性 言語 感情 時間 紛争 パプアニューギニア

### 1. 研究開始当初の背景

本研究で注目する事例のひとつは、エンガ語で「重みを置く (*kenda seta*)」と呼ばれる「呪い」の言葉の中でも、最も強力で、人々によって畏られる「死に際の言葉 (*kanji pii*)」である。「死に際の言葉」は、発話者と血を共有する親族に対して、紛争や軋轢を理由に口にされる。その言葉は、発話者の人生の状況の総体を背景として、狂おしいほどに強烈な感情を込められ、被発話者の「血の中に置かれる」。そのため、発話者の身体が死に絶えた後も、被発話者の身体内部にいつまでも残り続け、いつの日か発話者自身の代わりとなって、その言葉が相手を死に至らしめる。こうした「伝記的な生」の重大な局面に発せられる感情的な言葉を、環境や諸物に分配された人格の諸身体の一つ、すなわち「言語身体」として新たに概念化することは可能か。これが、本研究課題の核心をなす学術的な問いである。

本研究の学術的な背景として、人類学の紛争とその処理を扱う研究は、生態学的アプローチから社会構造論、法人類学まで蓄積が厚い。しかし、それらの先行研究は、構造や規範中心の分析だけでは説明できない感情の問題を見落してきた。紛争研究では、いかに紛争で怒りが生じ、鎮静化するかを解明することは、長らく最も重大な課題とされてきたが(栗本英世 1999 『未開の戦争、現代の戦争』)、未だ研究が蓄積されていないのが現状であった。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、これまで申請者が、パプアニューギニアで研究してきた紛争の処理と感情の動態という枠組みを、新たに過去・現在・未来にわたる「伝記的な生」に光を当てる「実存の時間の人類学」的アプローチへと展開し、紛争とその処理の文脈で発せられる感情的な言葉や、親しい者との葛藤を抱えた者が苦悩とともに残す「死に際の言葉」が、周囲の人々の現在に影響し、未来にわたって持続する効果をもつに至る社会的機制を解明し、独自の身体-感情言語論として理論化することにある。

この点を追求するため、パプアニューギニア高地エンガ州を対象に、当該地域で社会的に最も注目される「死に際の言葉」を取り上げ、その言葉が残された者たちの現在と未来をいかに規定するに至るのかを、感情や言葉の民俗理論、身体観等との関連から調査する。次にエンガ州の紛争処理の枠組みとその歴史の変遷や、そこでの感情とともに発せられる言葉の意義を、生涯にわたるライフサイクルや、個々人の実存的な「伝記的な生」の時間的深みのもとで解明する。これらをふまえ、紛争に起因する身体-感情言語論と「実存の時間の人類学」に関する一般理論の構築を目指す。

### 3. 研究の方法

申請者はこれまでパプアニューギニア高地エンガ州の事例から、紛争処理を「感情の調停」という独自の視点から分析してきた。具体的には、クラン(氏族)内外の紛争を対象とし、その処理方法である仲裁や村落裁判における個人の怒りの制御や抑圧、ならびにその解消過程を記述・分析した。感情の扱い方がそれぞれ異なる制度に着目することで、本来、主観的で捉えがたい感情を、観察可能な次元で対象化し、それらの制度の比較から感情の現れ方や変容過程を浮き彫りにする方法を確立した。

しかし、そこで取り残された課題が、紛争とその処理の文脈における言語・身体・感情の関係をいかに理論化するか、という問題であった。紛争とその処理のなかでは、言語や当事者間の感情的・身体的な関わり合いは、民族誌的な記述のレベルに顕著に現れるにも関わらず、その理論的考察の枠組みは、これまで全く築かれてこなかった。従来、感情の人類学は、感情の言説中心の分析(Lutz & Abu-Lughod eds. 1990 *Language and the Politics of Emotion.*)から、行為・身体中心の分析(Milton & Svasek eds. 2005 *Mixed Emotions.*)へと理論を単線的にシフトさせており、そこでは、感情について言語と身体の関係性を問う視座が決定的に欠けている。この視座は、我々の感情をめぐる日常経験を鑑みても、看過すべきではない、重大な論点である(cf. 菅原和孝 2010 『ことばと身体』)。

さらに紛争研究や感情研究で見落とされてきたのが、紛争とその処理や感情がもつ時間の次元である。紛争の要因が複雑に絡み合い、容易には解消不可能なかたちで継続するニューギニア高地の社会状況において、紛争に起因する感情の持続の問題は、紛争処理の一時点だけを見ていては理解できない。強烈な感情とともに口にされる「死に際の言葉」に顕著なように、感情的な言葉は、人の「伝記的な生」の生涯にわたる時間的な現象であり、ときに人の死後も継続する社会的効果をもつ。この問題にアプローチするにあたって、語りのみならず、身体や情動が、過去や記憶を把持し、未来を予持する時間的な現象であり、そこにおいて新たな関係性が不断に生成することを示す、時間の人類学(e.g. 西井涼子 編 2014 『時間の人類学』)に接続し、身体の朽ちる間に強度の感情をもって発せられる「死に際の言葉」を射程に入れた「実存の時間の人類

学」へと発展的に展開する。それによって、紛争と感情の時間の次元を、身体と言語の関わりまで含めて、総体的に把握する理論的枠組みを築くことが可能となる。このような理論構築は、これまで全くなされてこなかった新規の試みである。本研究は、既存の紛争処理や感情の研究からはこぼれ落ちる、紛争状況の言語と身体・情動の時間的な次元を掬いとり、人々の実存的な「伝記的な生」のなかで、いかにして感情的な言葉が周囲の人々の過去・現在・未来に持続的な影響を及ぼし、新たな関係性を不断に生成させてゆくのかを問うてゆく。以上が、本研究の方法である。

#### 4. 研究成果

上記の目的を達成するため、ニューギニア高地エンガ州村落を調査地に選定した。「死に際の際の言葉」の事例は、現地の「心臓」概念モナ (*mona*) に基づく。モナは人の身体状態を左右する器官(心臓)であると同時に、思考や感情が宿る座でもあり、怒りや悲しみといった感情変容はモナの状態であるとされ、それが身体の状態変容に直結する。そればかりか、ある人 A の感情は、その人と血を共有する親族 B の身体にも直接的に作用を及ぼす。なかでも、発話者の怒りや苦悩を体現する言葉は、それ自体「重み」となって、血縁者に病や死をもたらし。また、この「言葉」は必ずしも明確な意味を担った言語の形態を取らなくてもよい。例えば、大切な財(自らの「モナになった」物)を盗まれた者が咄嗟に叫ぶ「エーッ」という引き声は、それ自体が、発話者の死後でさえも、盗人を捕え殺す。これらの事例では、苦痛に満ちた叫びや言葉それ自体が、発話者の身体代理となって、その言葉が向けられた者に物理的な作用を及ぼす。こうした事例を、文化人類学で言う「妖術」の範疇に安易に回収せず、エンガ州に特異な感情の民俗理論や言語観・身体観から、身体境界を越えて社会空間に分配された「諸身体(諸心臓)」の問題として調査し、そこでいかに身体・情動と言語が密に結びつき、言葉がエージェンシーを発揮するに至るかを解明した。それによって、単なる言葉が、多大な社会的影響力をもつに至る社会状況とその動態を明らかにした。

さらに当該地域において、紛争に起因して発せられる感情的な言葉に対する社会的・文化的関心は極めて高く、その証左として、この言葉に対処する諸制度が用意されている。具体的には、慣習的な仲裁、植民地期に導入された村落裁判、キリスト教の告白儀礼等である。ただし、それらの場における「感情の調停」は、一時的に怒りや悲哀を緩和し言葉の効力を軽減するものの、本質的に完全解決が達成される類のものではなく、ゆえに、当時者の感情が再度悪化すれば、問題の言葉も再び社会的効果をもちうると考えられている。こうした状況下、人々は身体-感情的な言語とどのように向き合い、その言葉が埋め込まれた文脈を創り変え、生者や死者の感情や言葉を取り扱っていくのかについて、紛争処理の諸形態や、土着の死生観や靈魂観、ライフサイクルの時間性まで視野に入れた調査を行った。そこから、個々人の実存的な「伝記的な生」の時間的深みをもつ感情的な言葉が、紛争処理における言語的な操作や「感情の調停」でいかに再解釈され、過去・現在・未来にわたり変容を被ってゆくのか、あるいは、逆に残された人々を突き動かしていくのかを明らかにした。

以上の事例研究をふまえ、次の理論研究を行った。言語行為論に基づく古典的な紛争・感情・言語論(e.g. Rosaldo 1982 *The Things We Do with Words. Language in Society* 11) から、近年の紛争・身体-情動研究(e.g. Navaro-Yashin 2009 *Affective Spaces, Melancholic Objects. J R Anthropol Inst* 15)、倫理と感情の人類学(e.g. Allard 2013 *To Cry One's Distress. J R Anthropol Inst* 19)等を検討し、独自の身体-感情言語論を彫琢するとともに、人と物が共に紡ぐ「伝記的な生」を主題化した時間の人類学(Gell 1998 *Art and Agency.*) さらに特異な「実存主義」へと展開した「実存の時間の人類学」(e.g. Corsín Jiménez 2004 *The Form of the Relation.* online manuscript)等を検討し、の理論と接合して、さらなる理論的な発展を試みた。

パプアニューギニアの紛争処理に関する近年の国内外の研究動向は、他地域の研究と同じく、紛争後社会における国家や NGO、キリスト教会主導の平和事業を取り扱う「社会制度論」に偏向している(Regan 2010 *Light Intervention.*; Hermkens 2013 *Like Moses Who Led His People. Oceania* 83)。これに対し、本研究は「社会制度論」中心の視点からはこぼれ落ちる、社会規範や文化的な価値観のみには還元できない、代替不可能な個別の人格の生や、その身体的なプロセスに縫い込まれた言葉のあり方を問う、実存的な「伝記的な生」を扱う時間の人類学と紛争の身体-感情言語論を接続した総合的アプローチを提唱し、それを実証的に解明する点で独創的である。

本研究で扱う個別具体的な民族誌的コンテクストと社会生活に定位した実存の問題は、人類学が現地調査に根ざす社会科学かつ人文学であり続ける以上、構造主義やポスト構造主義、さらには近年のポスト・ポスト構造主義の隆盛のなかで葬り去られるべき問題ではない。本研究は、個別具体的な人格の生涯にわたる関係性に光を当てる「伝記的な視点(biographical perspective)」を導入することで、従来の紛争研究、感情と言語の人類学、自我の人類学、人格と社会性の人類学、時間の人類学、身体論や記憶論等の理論的知見を新規の角度から再解釈し、

「実存の時間の人類学」に根ざした紛争の身体-感情言語論、という新たな問いに基づく実証的・理論的枠組みを構築した。その点で、広く国内外の紛争研究、感情研究、言語研究、文化人類学等に有用な知見をもたらした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 深川宏樹	4. 巻 87 (2)
2. 論文標題 イメージの運動の人類学的記述 ニューギニア高地の植民地期／脱植民地期における「白人」イメージの民族誌	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 170-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 深川宏樹	4. 巻 -
2. 論文標題 「言語身体」とサブスタンス論の臨界点 ニューギニア高地エンガ州における「重み」の言葉の事例から	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『サブスタンスの人類学 身体・自然・つながりのリアリティ』松尾瑞穂編	6. 最初と最後の頁 111-149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 FUKAGAWA Hiroki	4. 巻 -
2. 論文標題 Legal Consciousness and Predicament of Village Courts in a “Weak State”: Internalization of External Authority in the New Guinea Highlands	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『Grassroots Law in Papua New Guinea』Melissa Demian ed.	6. 最初と最後の頁 23-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 社会的身体民族誌序説 ニューギニア高地における人格論と社会性の人類学
3. 学会等名 神戸大学大学院国際文化科学研究科 研究推進インスティテュート
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 イメージの運動の人類学的記述 ニューギニア高地エンガ州サカ谷の植民地期 / 脱植民地期における「白人」イメージの民族誌
3. 学会等名 神戸人類学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 深川宏樹
2. 発表標題 他なるもの の記憶から 他なるもの との生成へ ニューギニア高地の植民地期 / 脱植民地期における「白人」イメージの民族誌理論
3. 学会等名 国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 深川宏樹（風間計博・梅崎昌裕（編））	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 291
3. 書名 オセアニアで学ぶ人類学	

1. 著者名 深川宏樹	4. 発行年 2021年
2. 出版社 風響社	5. 総ページ数 446
3. 書名 社会的身体の民族誌 ニューギニア高地における人格論と社会性の人類学	

1. 著者名 深川宏樹（川田牧人・松田素二（編））	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 454
3. 書名 世界の冠婚葬祭事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>リサーチマップ  <a href="https://researchmap.jp/fukagawahi/roki">https://researchmap.jp/fukagawahi/roki</a>          神戸大学大学院国際文化学研究所  <a href="http://web.cla.kobe-u.ac.jp/teacher/%E6%B7%B1%E5%B7%9D-%E5%AE%8F%E6%A8%B9">http://web.cla.kobe-u.ac.jp/teacher/%E6%B7%B1%E5%B7%9D-%E5%AE%8F%E6%A8%B9</a>          神戸大学国際人間科学部  <a href="https://www.fgh.kobe-u.ac.jp/ja/staff/%E6%B7%B1%E5%B7%9D%20%E5%AE%8F%E6%A8%B9">https://www.fgh.kobe-u.ac.jp/ja/staff/%E6%B7%B1%E5%B7%9D%20%E5%AE%8F%E6%A8%B9</a></p>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------